勉強会補足資料②

庚申塔について:
庚申塔を建てたのは、庚申講を結んだ時とか一定の回数や期間の庚申待ちを無事終了した時の記念との説明で良いか、との疑問点に対する田村理事長の補足説明は下記のとおり。

『流山庚申塔探訪』にあるように、一番最初に出てくるのは、「山王二十一仏板碑」。比叡山の僧が唐から帰国後日本に広めた。当初はお寺と結びついて行っていたので、お寺のご本尊や、如意輪観音、大日如来、阿弥陀如来、釈迦如来などが信仰の対象になっていき、青面金剛へと変遷していった。
お寺から離れ、民間だけでやるようになっても変化しているし、幕末頃になるとまた変化していった。それまでは「現世」と「来世」の利益を求めるものだったが、「来世」はお寺に任せ、「現世利益」が中心の信仰となった。
海のほう、農業のほう、山のほうなどの地域それぞれに信仰があり、変化していった。柳田国男は「年中行事である」と述べている。
また、我孫子の駅にある大きな庚申塔は「鉄道庚申塔」と言われていて、明治以降、事故で亡くなった人の供養塔となっていた。
いつの時代、どこの地域ということで考えないと、一律の正解はない、ということ。